

ハグ太郎



白谷瑞希

目次

はじめに	1
鬼たちと僕	2
教える	4
雨	5
ハグ	6
旅	8
仲間	9
いい子ちゃん	10
胃痛	12
蜻蛉	14
病院	15
生きてこそ	17
終電	18
何の為に	19
いのち	20

はじめに

この本を執筆するに当たり、名前は伏せさせていただきますが、ご協力や応援してくださった方々、並びに編集者の皆様に心からお礼申し上げます。

鬼たちと僕

今僕の周りにはたくさんの鬼たちがいる。青鬼、赤鬼、黒鬼……。それはもうたくさんの。鬼たちに囲まれるという特殊な状況。

「ちょっと待った！ 順番～！！」

そう、皆僕にハグをして欲しいのだ。ハグをして欲しくて、押し合いへし合いをしている。中には嫉妬のあまり、黒鬼に変色してしまう鬼たちもいて。ハグをしてから、僕は鬼たちにモテモテというか、おかあさんみたいな存在になってしまった。

旅を続けて、僕はたくさんの鬼たちと友達になった。みんな、事情があって鬼になってしまっただけで、気のいい奴等だった。

しかし、今は真っ昼間で、ごっつい鬼たちに囲まれていて……。ちょっと恥ずかしいぞ。これ。

「次は私です。いいですか？」

ボブと名付けた、デカイ体に強面の屈指の男鬼が自分を指差して順番を待っている。こいつをハグするときは、僕も汗だくだ。力いっぱいハグをしてくるから。それでも大事な大事なボブ。

さあ、こい！

ぎゅー！

そんなこんなで、僕はハグで忙しい訳だけど、なんだか、こんな毎日でいいのか、とか考え始めて……。

そして、果たしてこの生活が鬼たちにとっていい影響を与えているのか、悩み出したんだ。

教える

鬼たちは、昼間に僕と一緒に人間の村の手伝いに出かける。晴天の青い空の下、汗だくになっての労働はいいなあ。鬼たちも喜んで、労働をしているのだが、最初は人間に喜んで貰える筈の労働だったが、最近は鬼たちが増えるに従って、違う考えの鬼たちもいるようだ。

ハグ目当てー。

言いは悪いけど、そう言うしかない。労働の後のご褒美のハグを待っているのだ。そこ、違うんだよなあ。

何度も繰り返し、鬼たちに説いてきた。あのね、本当に善いことをするというのはね、した後に自分がしてやった、というのを忘れるんだよ。

そして、何より「させて頂く」というおもてなしの精神が大切なんだ。それからね、ハグはご褒美じゃないんだよ。

メモする鬼たち。そして、次の日にお腹が空いて、そのメモを食べちゃう鬼たちー。
食欲と一緒に、飲み込んだらメモの内容を忘れちゃう鬼たちー。

はあ。思わず溜め息が出る。鬼たちとは長い付き合いになるだろう。僕も鬼たちと話をしているうちに、なんだか家族みたいになってきた。寝食共にしてるしね。

さあ、課題が出てきた。この鬼たちにどうやって説明したらいいのか。そう、教えさせて頂けたらいいのか。

僕も勉強だ。

雨

そんなこんなで悩んでいるうちに、今日は雨が降ってきた。雨宿りをしなきゃ。鬼たちと仲良くなった幸次郎さんの軒下に入れてもらう。幸次郎さんは寒がる僕たちに、お茶を淹れてくれた。幸い、今日は手伝いにくる鬼たちも少なかった。だから、ひとりひとりに熱いお茶が配られた。

「偉いねえ。文句も言わず働いてくれて。みんな、村の者は助かっているよ」

幸次郎さんはそう言って、僕たちを労ってくれた。鬼たちにこの言葉が届くといい。僕は、そう願わずにはいられなかった。

雨脚が強くなってきた。今日、仕事を終えたら、鬼たちはきっとまたハグを求めてくる。

心がどんよりと濁ったような気になってきた。ああ、こんな心があったなんて。僕の中に、鬼たちをどこか疎ましく感じ始めた心が。これでは共倒れだ。なんとかしなければ。僕は、鬼たちに幸せになってもらいたいんだ。

その夜、僕は鬼たちと話をすることにした。

ハグ

瓦葺きだが、雨の凌げる鬼たちと暮らす家。大家族みたいになっている。
僕はこれから、どうなるのだろう。鬼たちと離れ離れになることも、視野に入れなければならぬ。

「なんの話ですか？ ハグ太郎」

最早、ハグをし過ぎて鬼たちに名前を「ハグ太郎」に変えられてしまっている。この時点で気づくべきだったんだ。

「あのね、よく聞いてー。
僕が何の為に村々を旅してきたかは話したよね？ 最近、気になっていることがあるんだ。僕がハグをすることによって、君たちの欲が増している気がするんだ」

ざわざわと、鬼たちは騒めき始めた。

「辛いときは、ハグしよう。でも、そろそろ君たちは自分の足で歩くことも学ばなくちゃ」

数名の鬼たちが泣き出した。

「ご褒美を貰えない」

「ハグ太郎は、俺たちが嫌いか？」

愛されなくて育ってきて、鬼になった境遇の存在たちだ。無理もない。この反応は予期していた。

「違うよ。辛いときは、僕に頼っていい。けど、君たちはもう一人じゃない。村の人たちもいる。ステップアップする時が来たんだ。僕にハグされる前に、寂しい時は自分を癒すんだ」

目にうるうる涙を溜めて、鬼たちは怪訝な表情を浮かべる。

「自分を癒すってどうやって？」

僕はニコッと笑った。

「自分を抱きしめてごらん。そして、村の人たち一、とりわけ、君たちと同じく寂しい思いをしてきた子どもたちを抱きしめてあげてごらん。

僕は前から言ってきた。分け与える幸せが、大事だって。今度は君たちが分け与える番なんだ」

まだ騒めきが止まらない鬼たちの中で、ボブが突然立ち上がって、自分をぎゅっと、抱きしめた。

「これでいいですか？」

「どんな気持ち？」

「ちょっと・・・温かい。恥ずかしいけど、心地いい・・・」

そうボブが言うと、周りの鬼たちも真似し始めた。

「そう、温かいんだ。自分を大切にするって、心地いいことなんだよ。今迄たくさんの人たちにハグされてきた。その人たちには温かい血が流れてる。君たちにも温かい血が流れてる」

鬼の目にも涙。じゃなく、鬼の目には涙。求めることだけじゃなく、例え小さな力でも僕たちは歩き出せるよね。

旅

人生は旅によく譬えられる。この苦しみ的人生で、何を一番に求めて、どうやって生きていくか。その道程で学ぶことは、たくさんある筈だ。

煩悩の塊で鬼になってしまった哀しき鬼たち。それは、欲が深すぎたのかもしれない。人間、欲は必要だし大切だ。だけども、間違えて使うと、人も自分も傷つける。

鬼たちは、僕にハグをその後も強請った。僕はハグをしながら、セルフハグを根気強く教えた。そして、泣いている子どもを見つけたら、ハグをさせた。

鬼たちは今まで自分に自信がなかった。だから、僕の声も届かなかった。けれど、幸せの第一歩は自分が自分を取り戻すこと。

長い人生、まだまだ苦しいことがあるだろう。僕はここにいる。いつでも側にいるから、安心して旅をしておいで。

苦しいとき、辛いときはハグをするよ。でも、それは君たちがまたひとつ自分を愛せるようになったから。

いや、理由なんかないか。

与える幸せを、僕にくれてありがとう。

仲間

白谷瑞希

いい子ちゃん

いい子にならなきゃ。いい子にならなきゃ。じゃないと、誰にも愛されない。お母さんに、お父さんに愛されないー。

小夜子は学校の帰り道、呪文のように繰り返し、そう呟いていた。道端の石ころが目に入ったが、蹴飛ばさない。アリさんも踏まないように歩く。

だって、いい子でいたいから。

赤いランドセルが揺れる。泣いているのだ。泣きながら口笛を吹いているのだ。

今日、学校でテストの点が悪かった。とは言っても八五点なのだが、お母さんはなんて言うだろう。家から出されるかもしれない。そうしたら、今日泊まる所は何処だろう。

小学一年生の小夜子にとって、テストの点はそれ程重いものだった。それは同時に両親の普段の厳しさも表していた。

前に、こんなエピソードがある。友達の恵梨ちゃんのお誕生日会に招かれた。小夜子は眠れないほど、その会を楽しみにして、早速お母さんに行ってもいいか、許可を求めた。

お母さんは、ダメだと言った。こないだの通信簿の結果が良くなかったから。それが、理由だった。恵梨ちゃんには絶交された。小学校で初めてできた友達だった。

塗り絵を買って貰えなかった。テストの点が九〇点だったから。小夜子は知っている。「かんぺきしゅぎ」という言葉を。大人たちはその言葉をよく使う。でも、その意味をよくよく理解しているのは、一年生では小夜子だけかもしれない。

だから、八五点を取ってしまったことが怖いのだ。泣きながら口笛を吹くほど不安なのだ。

「ただいま～」

帰りたくなかった家に、笑顔で帰る。お母さんは笑って許してくれるだろうか。少し引き攣った笑顔に気づいてくれるだろうか。

胃痛

家からは出されなかったけれど、案の定お母さんに、叱られた。優里ちゃんは七〇点でも褒められるよ、喉まで出かかったけど、とうとう言えなかった。

優里ちゃんは頭を撫でられたよ、それも言えなかった。小夜子はお母さんにもお父さんにも、頭を撫でられたことがない。一体どんな感覚なのだろう。

いいなあ。撫でられてみたいなあ。抱きしめられたら、どんな気持ちになるだろう。

そんな気持ちで、毎日無理矢理に笑顔を作り、辛くても笑い続けていたら、鳩尾が痛くなってきた。なんでだろう。体は正直だ。私の本当の気持ちは、この鳩尾の痛さだ。そして、暴れたいほどイライラする。どうしたらいいのか分からない。

私はいい子だから、誰かに当たったりしません。

また口の中で何度も繰り返した。

ふと、思った。私はなぜ生きているんだろう。死んだら何処に行くんだろう。

ランドセルが重かった。肩が痛い。パンパンに腫れている気がする。ランドセルの重さもまた、小夜子の心の重さだった。

そんな時、蜻蛉を見つけた。学校の帰り道、秋の夕暮れ時に草むらの中で。

可愛いなあ。ペットにしたいなあ。うちは動物飼うのは禁止。マンションだから。蜻蛉をペットと言うのは、可笑しいかもしれないけれど、飼ってみたい。

そーっと、蜻蛉を捕まえようとする。ぐるぐる指で目を回して、目が回ったところを捕まえる。担任の藤子先生が理科の授業で教えてくれた。

蜻蛉は呆気なく、小夜子の手に乗えられた。可愛いなあ。でも、このまま持ち続けていたら、きっと羽根がもげてしまう。溶けてしまいそうな羽根だもの。何か入れておく場所はないかなあ。

そうだ！ ペンケースの中に入れよう。

そうすれば、逃げないし家まで保つだろう。まだ幼い小夜子には、知恵が足りなかった。小夜子はペンケースにそっと、蜻蛉を入れて入り口を開けたまま、ランドセルにしまったしまった。

蜻蛉

「お母さん！ 蜻蛉、蜻蛉を捕まえたよ！ うちで飼ってもいい？」

「ただいま」を言うのも忘れ、家に着いて直ぐにお母さんに聞いた。小夜子は興奮していた。

お母さんはすぐに小夜子の側に來たが、その顔は青ざめていた。

「ちょっと、見せてごらん」

小夜子は得意顔でペンケースを取り出した。蜻蛉は鉛筆や消しゴムに揉まれて、クタッと息耐えていた。小夜子の体から力が抜けて、全身の血液が冷えていくのを感じた。

パチン！

お母さんは小夜子の手を軽く叩いて言った。

「蜻蛉さんも、生きているんだよ。軽々しく捕まえたり、こんな風に閉じ込めたら駄目なんだよ。生きているものたちは、みんな小夜子の仲間だよ。蜻蛉さんの命も同じように尊いんだよ」

じわじわと、小夜子の目に涙が浮かんできた。蜻蛉を死なせてしまった。あんな可愛い蜻蛉を。私は一体何をしたんだろう。ちっともいい子じゃない。これじゃあ、愛されないのも当然だ一。と同時に、また鳩尾が痛くなってきた。どんどんその痛みは強くなる。小夜子は痛み意識を手放した。

病院

半分意識を取り戻したのは、車の中だった。お父さん？ 運転しているのはお父さんだ。まだお仕事のはずなのに…。温かさを感じる。お母さんが私を抱っこしていた。

「小夜ちゃん、ごめんねえ。こんなになるまで辛かったんだね。お母さんが悪い。気づかなくてごめんねえ」

抱っこされた小さな肩に、ぽたりぽたりと、涙が落ちる。温かい涙だった。お母さんの体温を感じた。

「いや、俺も悪いよ。小夜子はしっかりしてるから、甘えさせちゃいけないと思ってしまったんだ。ごめん」

お父さんの声がか弱かった。不安と後悔の入り混じった声だった。

私は蜻蛉を死なせてしまって…許されないと思っていたんだ。私は、もしかして愛されていたの？

お母さんとお父さんの愛情が心地よくなって、小夜子はまた意識が朦朧としていった。

病院で目が覚めたら、腕に長い管がついていた。点滴というものと、看護師さんが優しく教えてくれた。

病名は「いかいよう」。どんな病気か分からないけれど、お父さんとお母さんは病院の先生に叱られて、ペコペコと頭を下げていた。

小夜子は、いい子でいる必要がなくなった。素のままの小夜子でいいのだ。大好きな両親に愛されているのを知ったから。どんなことをしても、抱きしめてくれる腕を知ったから。

そして、今日もアリさんを踏まないように歩く。そう、生きているものたちは、みんな仲間だからだ。

小夜子の笑顔は本物になった。

生きてこそ

白谷瑞希

終電

今日も残業だった。手当で金はない。終電の電車の中で、吊り革に疲れた体を預けるようにして、金田鉄郎はひとりごちた。

ブラック企業と言われるところは今なら何処でもあるだろう。就職の際、大学の同期だった奴等は、企業を自分で立ち上げていたりする。自分で会社を作りクリエイティブしていく。そんな時代だ。俺には、ハッキリ言ってたいした能力も才能もない。閃くこともなければ、特技と言えばパソコンがやや使える程度か。

だからなのか、毎日残業になる。パソコンが不得手なのに、そこを舐められているのか、更に仕事を増やされる。

コピーやら、急な接客やら、今どきアルバイトの人でも対応できそうなものを振られるのだ。しかし、そんなアルバイトでもできそうな仕事が上手くできない。正社員なのに。回ってくるのは、上司ではなく先輩からだ。どうやらトロいと言えば最早死語になるのかもしれないが、のんびりしているように見える俺への当てつけかもしれない。

終電だからか、人はまばらだ。

朝は満員電車で早くから揺られて出勤する。痴漢に間違えられないよう細心の注意を払いながら。冤罪になんてなったら、両親に顔向けができない。

鉄郎に妻子はまだいなかった。出会いの機会も時間もない。支えてくれる存在や、守るべき存在がないのも、また鉄郎の心を暗くさせた。せめて、帰って温かいご飯があったら。そんなことを夢見ながら、鉄郎はうつらうつらと睡魔と電車に揺られて家路に向かった。

何の為に

残業どころか、徹夜が続いている。いや、残業含めてなのだが。新しいプロジェクトの下準備が終わらない。エナジードリンクを飲んで、デスクに向かう。苦手なパソコンに四苦八苦しながら、キーを打ち込む。頭を抱えて時折、叫びたくもなる。

俺は一体何の為に、この仕事をやっているのか。生きるため？ 食べるため？ こんな疑問が頭をよぎっては消えていく。

とうとう徹夜も四日目の朝になった。駅のコンビニでコーヒーを買い、少し休むつもりで駅に向かった。ただ、いつもと違う感覚に襲われた。電車が向かってくる。否、電車に引き寄せられるような感覚だ。

本能で、これは危ないと思う。しかし、朦朧とした頭で思うのは、もういいか、という考えだった。

引き寄せられる。物凄い力に。気づけば、パーーッと笛の音が聞こえた。

いのち

ドシーン！

笛の音が聞こえたと思ったら、思い切り体が飛んでいた。

「馬鹿もん！ 命あつての物种だ！ 何考えてる！」

怒声に驚いて、上半身を起こしてみると、見慣れた社長の顔があった。俺を突き飛ばして、助けてくれたらしい。見れば、真っ赤な顔をして怒っている。

「社長～・・・」

自分でも情け無い声が出た。いつの間にか涙が零れていた。どこかでほっとしている自分がいた。

「隈が酷い。何日寝てない？ 頑張り過ぎだ。一体誰がお前にこんなに・・・」

社長の目にも涙が浮かんでいた。人情脆い社長と有名なのだ。

事情を聞かれ、一から話した。話し終わると社長は俺の肩をポンと叩き、笑った。

「お前は何も心配しないで、帰って寝ろ。いいか、何も心配しないんだぞ」

そして、心配だったのか、俺の家の最寄りの駅まで送ってくれた。荷物は会社に置きっぱなしだったが、その日は何も考えずに泥のように眠った。

次の日、疲れてはいたが、なんとか寝坊せずに出勤すると、自分のデスクがなかった。上司に聞くと、配置変えがあったという。

新しい部署に行ってみたら、職場の貸し出し図書の部署だった。アナログ人間の俺に、社長は最大限の配慮をしてくれたのだ。

人の命は地球より重いという。
死ななくて良かった。
人の優しさに出逢えたのだから。

しかし、突き飛ばされてホッとした俺に、本当に死にたい気持ちはなかったのだろう。しかし、こうして、毎日たくさんの命が消えていくのだ。

俺は、これから折角図書の部員にもなったのだから、たくさん本を読んで命を守るにはどうしたらいいのか、学びたいと思う。

ハグ太郎

著 白谷瑞希

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
